

# 農薬事業とSDGs



# 1. 農薬事業とSDGs

## 農薬事業の概要

### 国内

- ✓ 水稻・野菜・果樹や農耕地以外の殺菌・殺虫・除草剤など、200以上の全製品をJA（農協）を通じて販売しています。
- ✓ 各都道府県に営業担当者を置いて地域に密着した活動を行い、農薬の正しい使用方法についての指導も行うなど、安全で安心な農作物の生産を支援しています。
- ✓ 営業・技術担当者は、緑の安全管理士（\*1）やJGAP（\*2）指導員の資格を取得し、持続可能な農業につながる情報の提供をきめ細やかにしています。

### 海外

- ✓ 世界では人口増加による食糧不足から農作物の安定確保が重要な課題となっており、農薬の需要は高まっています。
- ✓ 当社では、自社開発製品を、主にアジア、北米、中南米などに輸出して、病害虫や雑草から農作物を守るなど世界の農業に貢献しています。
- ✓ 2016年に米国にマーケティング子会社を設立、2019年にベトナムに試験農場を開設するなど、海外での普及体制を強化しています。

### 製造受託

- ✓ 殺虫剤・殺菌剤・除草剤などの製剤および包装の受託製造を行っています。
- ✓ 新たに日本において農薬登録を受ける他企業製品の製剤設計、委託生物試験用製剤、処方変更にかかわる製剤設計などのコンサルティング業務を行っており、当社の製剤技術が他の多くの農薬製品に活用できるよう、窓口を開いています。

## SDGsとの関連



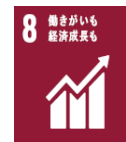
### 2 飢餓をゼロに(※2.1、2.3、2.4)

- ✓ 当社の農薬で農作物を病害虫や雑草から守ることで、収量・品質を確保し、世界の食糧需要に応えます。



### 3 すべての人に健康と福祉を(※3.d)

- ✓ 当社の農薬が強い毒性を持つカビ毒の発生を抑制し、私たちを健康被害から守ります。



### 8 働きがいも経済成長も(※8.2)

- ✓ 当社の農薬は、農業の効率化に貢献し、農業の成長産業化に寄与します。



### 12 つくる責任つかう責任(※12.4)

- ✓ 農薬は、使用者に正しく使ってもらうことで安全でより効果を発揮します。当社では、JAや農家の方々に、製品ごとの使用方法について、適切に指導を行います。



### 15 陸の豊かさも守ろう(※15.2、15.4、15.a)

- ✓ 農薬を使うことで農作物の収量・品質を確保していることが、森林や非農耕地を守ることに繋がっています。

## 2.「研究開発」とSDGs

—新技術を開発し続ける～Challenge to Innovation—

### 研究 開発

#### □ 農薬製品の研究開発

- 農作物を病害虫や雑草から守り、世界の食糧需要に応え、農業の効率化に貢献し、農業の成長産業化に寄与する製品・技術の開発を目指して、日々研究を行っています。

#### □ 安全性の追求

- 農薬は、人や動物に対してはもちろん、河川や海、また土壌などの自然環境にも、より安全なものでなければなりません。
- 安全性研究部門では、製品開発段階で安全性評価を実施し、自然・環境により負荷の少ない製品を開発すべく、研究に取り組んでいます。
- 原体創製、生物評価、製剤の各研究部門と安全性研究部門が一箇所に集約され、研究者が間近で情報共有できる体制のもと、より安全な農薬の開発を目指します。

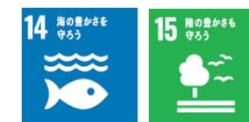
#### □ 研究方法

- 研究開発は当社独自で進めるものだけではありません。新たな製品や技術を開発するにあたっては、産官学の共同開発（パートナーシップ）にも取り組んでいます。

### SDGsとの関連



8働きがいも経済成長も(※8.2)  
9産業と技術革新の基礎をつくろう(※9.5)



14海の豊かさを守ろう(※14.1)  
15陸の豊かさも守ろう(※15.4、15.a)



17パートナーシップで目標を達成しよう(※17.17)

# 3.「製品」「技術」とSDGs

## 製品

### イプフェンカルバゾン(自社開発 水稲用除草剤)



#### 【特長】

・米作地帯の代表的雑草「ノビエ」の発生を長期間抑制

#### 【普及・展開】

- ・国内では、2013年8月に農薬登録を取得しました。
- ・2014年の発売以来、多くのお客様に使用されて好評を博しています。
- ・海外では、アジアの水稲市場を中心に開拓中。韓国ではすでに販売を開始しました。

### カスガマイシン(自社開発 水稲・園芸用殺菌剤)



#### 【特長】

・稲の主要な病害「いもち病」防除のほか、野菜・果樹類の細菌性病害にも高い効果を発揮

#### 【普及・展開】

- ・奈良市「春日大社」の土壌から発見された微生物が生産する成分を、当社が、農薬として開発しました。
- ・国内では1965年から発売、50年以上にわたって使用されています。
- ・海外では、アジアの米作地帯を中心に展開しています。
- ・2014年9月には、米国においてリンゴの火傷病防除剤としての農薬登録を取得しました。
- ・現在世界の約40か国で販売されています。

## 製剤技術

### Dr.オリゼ処方剤 (水稲用箱処理剤)



#### 【特長】

・水面施用剤のオリゼメートを、育苗箱施用のDr.オリゼ箱粒剤として開発 (Meiji Seika ファルマ(株)との共同開発、1997年9月登録)

・その後、殺虫剤との混合剤をDr.オリゼシリーズとしてラインナップ

#### 【メリット】

・田植え前に育苗箱に散布するだけで、田植え後の生育期に発生する病害虫を防除でき、作業負担を軽減できます。



## SDGsとの関連



2 飢餓をゼロに(※2.1、2.3、2.4)

8 働きがいも経済成長も(※8.2)

9 産業と技術革新の基礎をつくろう(※9.5)

- ・当社は、病害虫や雑草から農作物を守り、世界の食糧需要に応えることができる農薬製品を開発します。
- ・当社の製剤技術により、農作業を省力化し、農業生産の効率化に貢献します。
- ・当社が開発した製品および製剤技術が農業の発展に貢献し、農業の成長産業化に寄与します。